

一 はじめに

1 初期批判理論と精神分析

——一九三〇年前後の社会研究所における思想的絵模様——
コンステラチオン

徳 永 恂

「批判理論と精神分析」という課題を、フランクフルト学派の発展史に即して問おうとする時、人がまず思い浮へるのは、フロム対マルクーゼという対立図式だろうか。たしかに、かつての学派内部では、フロムは唯一の精神分析の専門家と言える存在だったし、フロイトについて唯一まとまった著作をものしたのはマルクーゼだけだった。その著作『エロスと文明』を基に、六〇年代にマルクーゼとフロムとの間で交された『ディセント』(Dissein)誌上での論戦については、すでに或る程度知られている。しかしその対立は、それ以後のアメリカにおける思想風俗状況の中で、「倫理的ヒューマニズム」対「政治的ラディカリズム」という図式の中へ固定的に吸収されていったように思われる。きわめて大ざっぱにそういう分類が可能であるにしても、見方を変えれば、両者の対立は、アメリカにおける「フロイト左派」内部でのフロイト解釈をめぐる対立と考えることもできるだ



ろうし、少くともアドルノとマルクーゼを一括して、それにフロムを対立させるという図式は一面的である。フロイトのリビドー論を修正し、あるいは外挿的に解釈枠を当てはめて、フロイトからオブティミスティックな可能性を引き出す点では、フロムとマルクーゼは共通しており、アドルノはそれに対立する。⁽¹⁾

そればかりではない。五〇年代にアドルノがホルクハイマーとともに亡命先のアメリカからドイツへ帰り——マルクーゼやフロムはアメリカに残る——、「社会研究所」を再建して華々しい活動を始めて以来——そしてそれ以後「フランクフルト学派」という名称が、はじめて一般に流布するようになるのだが——、フロムの名は、フランクフルト学派の歴史からは、ほとんど抹消されてしまった感がある。とりわけ日本では、フロムは五〇年代早々にアメリカの新しい社会心理学として紹介移入されたのに対して、フランクフルト学派の方は、六〇年代後半に、ベンヤミンやアドルノを中心に、ドイツの新しい哲学・芸術思潮として紹介され、前記フロム対マルクーゼの対立図式を介して、まったく別の影響圏へ流布定着していったために、フロムをフランクフルト学派の一員として取り上げること自体——ごく少数の識者を除けば——、奇異の感を与えるほどになってしまった。しかし数年のずれがあるか、ほぼ一九四〇年前後に執筆されたフロムの『自由からの逃走』と、ホルクハイマー・アドルノの『啓蒙の弁証法』とは、その発想・手法・叙述の仕方において、きわめてきびしい対照的側面を持つとはいえ、少くともその成立に関しては、共通の問題圏から発生しているのであり、共通面があるからこそ、差異も際立ってくると言えよう。『自由からの逃走』以後、フロムの著作はミリオン・セラーとなり、駅のキヨスクでも売られるほどポピュラーになっていくが、それと逆比例して、それ以前の仕事は忘れられていく。しかし少くとも三〇年代の中葉まで、社会研究所の活動の中でフロムが果たしていた役割の大きさは、過小評価されてはな

るまい。戦後のフランクフルト学派の中軸を形成していたのがホルクハイマーとアドルノの強固な結びつきだったとすると、三〇年代中葉までの研究所の仕事の中心は、ホルクハイマーとフロムの連携だったとさえ言えるのではなからうか。

フランクフルト学派の内的な発展史については、マーティン・ジェイの——生存メンバーとのインタヴューに基づく——先駆的労作が知られているが、ここ数十年の間に逐次完結したベンヤミン、アドルノ、ホルクハイマー、レーヴェンタール、マルクーゼ、フロムら、主要メンバーのドイツ語版全集、フロムをはじめとする遺稿集(アドルノの全三〇巻を予定されている遺稿集は未だ数冊の刊行にすぎないか)の刊行、そして未だ刊行されない文書、とくに書簡類を利用した数多くの研究書の刊行によって、われわれは、はるかに詳しい資料に接することができるようになった。⁽²⁾各メンバーが亡命先を異にした故もあって数多く残されることになった書簡類は、ベンヤミンの場合のように、いずれこの学派の思想研究の重要資料になると思われるが、私信の性格上、論文などの表面には現れない微妙な消息を伝えてくれる。「フランクフルト学派」という名称は、ハバーマスがその有機的統一性に疑念を表明して以来、今日ではあまり使われなくなった。たしかに各メンバーは、ファシズムにせよ実証主義にせよ、外部の敵への批判においては結束しているように見えるけれども、内部の人間関係においては、微妙な対立模様を画き、必ずしも思想的統一や同志的結束を示してはいない。しかし「学派」という名称は、もともと他称のものであり、外部から貼られたレッテルであったことを思えば、それを剥がすことこそ、かえって各メンバーの思想と人間の個性的意義を、そしてそういう異質的個性の共働作業の意味を明してくれるように思われる。⁽³⁾

「初期批判理論」の「初期」とは、ホルクハイマーが自分たちの立場を「批判理論」(Kritische Theorie)という



形特徴づけるのは三十七年の論文以降だから、それ以前の時期をさすが、この時期に関して新資料が明かにしてくれるのは、(1)ホルクハイマーの共同研究プロジェクトにおいて果していたフロムの役割の大きさ、(2)実証的「社会研究」に関する二〇年代と三〇年代の連続性、(3)当初からのフロムとアドルノの対立、であり、これらから、後期アドルノの哲学的視点によって蔽い隠されていたのではないか、ということである。

本稿は、右のような「フランクフルト学派」の発展史のなかで、「初期批判理論」と呼ばれている三〇年代におけるフロムの位置と役割を、「理念史」(Ideenの歴史)としてでなく、「状況史」(Konstellationの歴史)という視点から明かにすることにある。その場合「状況」とは、マンハイムの意味ではなく、ベンヤミンの意味で考えられている。つまり複数のイデオロギーの妥当性を、その担い手の「存在拘束性」に関わらせて相対化することではなく、歴史の横断面に働いている思想的星座の布置状況のうちに、歴史の「静止した弁証法」を見届けること、が目ざされている。具体的には、フロムが研究所に参加する三〇年代初頭と、研究所を離脱する三〇年代末という、二つの時点での研究所内部の思想的ファクターと人間関係の絵模様を画き出すことを通じて、ホルクハイマーの初期批判理論における「学際的唯物論」の構想が、その所期の意図を達成することなく、『自由からの逃走』と『啓蒙の弁証法』とに分裂していくプロセスの発端が辿られる。その方向の行方には、精神分析はいかなる意味で批判的ポテンシャルを持ちうるのか、という問いが、マルターゼやハバーマスをも踏まえて予想されるが、それに直接応えることは、なお本稿の射程外に属する。本稿は右の課題の前半部に当る三〇年代初頭の状況の解明に止らざるをえなかった。

二 フロムと「社会研究所」の出会い

西欧のいくつかの大都市と同じように、フランクフルト市も、かつて市を囲んでいた城壁が取り払われて、その跡を広いグリーンベルトの環状道路が走っている。その西北部の弧をなすゼンケンベルガー通りを挟んで、フランクフルト大学のメイン・キャンパス、法学部の高層ビルと向き合う東側の一角に、白い五階建の石造の建物か立っている。それが、あの「社会研究所」(Institut für Sozialforschung)である。現在の建物は、第二次大戦による破壊の後、戦後再建され、その後いくらか拡張されたものの、ほぼ戦前の姿を保っている。ここが、後に「フランクフルト学派」と呼ばれる思想集団の発祥の地であり牙城でもあったことは、よく知られているが、一九二九年から三三年春、つまりナチスによって研究所が閉鎖されるまで、この建物の一角に「精神分析研究所」が併設されていたこと、そしてここが初期批判理論と精神分析との結合の母胎となったことは、ほとんど知られていない。この研究所は、組織上は、ハイデルベルクにあった「西南ドイツ精神分析研究会」の支所であり、社会研究所とは相互に独立した形をとっていたが、たとえ間接的とはいえ、ドイツの大学の施設の内部に、はじめて精神分析が公的な場所を獲得したことは画期的なことだった。しかもそれが精神医学や心理学ではなく、「社会研究」の一翼として位置づけられたことは、後のフランクフルト学派の展開にとっても、大きな象徴的意味を持っていた。一九二〇年代末から三〇年代末までの初期批判理論のスローガンが「学際的唯物論」であり、その具体的テーマが、歴史学と心理学の共働であるとすれば、その作業を企画したホルクハイマーと、その作業を推



進したフロムとの結びつきは、さしあたりこの場所、この時点で行われたと言っている。二〇年代から三〇年代への変わり目という「運命の転換」の時期に行われたこの出会いの状況を、まず両者のそれまでの経歴に即しながら、当時の時代相の中に、「伝記的パノラマ」という形で展望しておきたい。

1 フロムの生い立ち

後年フロイト派の思想家として有名になるフロムも、最初から精神分析家として出発したわけではなかった。一九〇〇年、フランクフルトの正統派ユダヤ教徒の家系祖父は高名なラビに生れたフロムは、その雰囲気の中で人となる。まず同地の大学の法学部に入るが、彼の関心はやがて経済学をへて、社会学・哲学・文化史などへ移り、ハイデルベルク大学では、マックスの弟アルフレート・ウェーバーのもとで学び、二五年に哲学博士の称号が与えられた。タイトルは「ユダヤ教の戒律」で、「ディアスポラ・ユダヤ教の社会学」という副題が付されている⁽³⁾。この論文は一九八九年にはじめて公刊されたもので、未紹介と思われるからやや詳しく触れておこう。副題が示すように、この論文は、マックス・ウェーバーが古代ユダヤ教についてだけ行った宗教社会学的研究を、「離散」⁽⁴⁾以後のユダヤ教の歴史にまで延長しようとする意図で発想されている。ただフロムはたんにユダヤ教史の歴史記述をめぐしているのではない。歴史は巨視的にはアルフレート・ウェーバーの「文明化過程」という枠組みによって捉えられ、ユダヤ教の歴史は、(一)「カライ派」(八世紀頃バビロニアで成立した、『トーラ(モーゼ五律法)』に直結しようとする正統派)、(二)一八世紀以降の「改革派」⁽⁵⁾、(三)「ハシディズム」の三つに類型化される。ユダヤ教の特色は、「理念」と「社会体」(Gesellschaftskörper)との相互関係が、国家や教会によってではなく、まさ

しく「戒律」によって、直接に生活レベルで「相互滲透」(Durchdringung)するところに求められる。そこで、こういう戒律か信仰共同体の中で果す機能の差異を、前記三つのセクトについて比較検討することが、この論文の主眼となる。ごく大まかな結論からすれば、カライ派は、ユダヤの文化の自律性を保ちつつも、戒律をドグマ化するのに対して、西欧の市民層に広がる改革派では、「ユダヤ的精神に対する資本主義の精神の勝利」によって、戒律は個人化もしくは世俗化される。それに対して東欧の下層農民の間に広がるハシディズムは、経済的要因に基づく宗教の改変や、法的・政治的解放を欲することなく、「宗教的自己解放」をめざす。ここでは戒律は、カライ派のようにドグマ化されることなく客観的正しさを保持し、また改革派のように、「集団的受洗を避けよう」として不毛のイデオロギーにおちこむ⁽⁶⁾ことなく、創造的な宗教的解決をもたらし、「疑似メシアニズムを克服する」ことができる。

こういう論旨は、学位論文の性質上、アルフレート・ウェーバーの文化社会学の概念装置に則り、ゾンバルトの経済学的な、コーヘンの哲学的な、ブーバーの宣教的な、ユダヤ教研究に対する、文化社会学の独自性が力説されているか、その内的な認識関心が、ハシディズムの擁護ないし「ハシディズムとラビニズムの総合」という宗教的課題に置かれていたことは明かだろう。

事実この頃、二〇年から二五年にかけてのシオニズムの運動から手を引いたフロムは、連日のようにユダヤ教の師、ラビのラヴィンコフのもとに通って原典研究に打ち込み、またフランツ・ローゼンツヴァイクの主宰するフランクフルトの「自由ユダヤ学院」で、はじめは聴講生として、後にはテューターとして、ユダヤ教の知的覚醒運動に打ち込んでいたのである。この論文には、フロム自身の後の発展と照し合せて、あるいは当時のユダ

ヤ教やシオニズムをめぐる運動状況との関連で、多くの興味深い問題が見出せるが、ここにはまだ精神分析もマルクス主義も全然姿を現していない。学生時代の聴講科目を見ると、彼はマルクス主義理論や社会運動の講義を聴いているし、ヤスパーズの『世界観の心理学』講義にも接しているが、それらには、ほとんど関心を引かれなかったらしい。この点ではフロムの心理学ないし精神分析への関心は、新カント派の哲学を超えようとしてゲシュタルト心理学へ関心を持ったホルクハイマーや、彼に勧められて、「無意識論」で博士論文を書こうとしたアドルノよりも、むしろ遅れていた、と言ったことができよう。フロムの精神分析への関心は、学位取得後、一九二六年を境にして、突如として噴出する。そしてそれは同時に、マルクスへの関心と運動する形で起るのである。

二七年にフロイト派の雑誌『イマゴ』に発表されたフロムの処女論文「安息日」論は、彼のユダヤ教研究の方法論が、社会学から心理学、とりわけ精神分析的心理学に移ったことを示している。そこではユダヤ教の最高の戒律の一つである安息日は、フロイト流の「タブーの起源」という観点から、労働禁止のタブーとして問題化され、「オイディプス・コンプレックス」仮説を適用して、母なる大地を侵す労働という罪への贖罪という形で説明されている。⁽⁶⁾ こういう精神分析への接近は、たんに方法論レベルに止らず、実践的形でも起ってくる。

そのきっかけとなったのは、フリーダ・ライヒマンとの出会いだ。フリーダは精神医学をクルト・ゴールトシュタインのもとで学び、一九二〇—二二年の間フランクフルト大学へ来た彼の助手を務めていたが、その後精神分析と接触し、二四年春ハイデルベルクへ来て、彼女自身の診療施設を開く。この診療所はユダヤ教的色彩が強く、治療所^{セラピューシウム}をもじって「ユダヤ治療法所」と呼ばれたりしていたが、フリーダの——後にハナ・グリーン（ナナ・グリーン）の小説のモデルになるほどの——個性的魅力と相まって、フランクフルト界隈の学生や若い知識層を惹きつけ、

一種の知的革新運動の拠点になっていた。そこに集り、彼女から進んで精神分析を受けた青年たちの中には、エルネスト・ジーマン、レオ・レーヴェンタール、そしてエーリッヒ・フロムらが出た。

フリーダに傾倒したフロムは、二六年にはこの一〇歳年長の女性と結婚する。この結婚は、実質的には四年しか続かなかつたが、別れた後、アメリカに亡命して、フロムがフランクフルト学派から離れた後も、彼女とはホーナイやサリヴァンらと連なる同志として、長く交遊関係を保った。しかし結婚した二六年段階で、分析関係と夫婦関係は両立しないこともあって、フロムはフランクフルトで、彼が二度目に分析を受けたカール・ランダウアーをかつて精神分析の研究会を始める。この、後に強制収容所で非業の死をとげるカール・ランダウアーに、ホルクハイマー自身が、レーヴェンタールを介して、教育分析を受けていたのである。ホルクハイマー自身にとっては、それは「ノートなしには講義できない」悩みを解決したい、という程度のものであったらしいが、とにかくこの縁で、ランダウアーを所長とする精神分析研究所か、社会研究所の建物の中に寄留する形で設立されることになる。そしてフロムとホルクハイマーの本格的な結びつきが、ここから始まることになる。

すでにフリーダのサナトリウム運動が、貧困階級の救済という社会運動的色彩を持ち、マルクス主義への傾斜を示していたのだが、フロムが三〇年から本格的な分析医としての修行を積んだ「ベルリン精神分析研究・診療所」は、当時マルクス主義と精神分析の結合をめざす尖端的試行の牙城だった。とりわけそこで出会ったライヒの影響は——後にフロムは沈黙し、ライヒはフロムへの失望を表明しているが——きわめて大きかった。精神分析とマルクス主義の理論的結合点としての「性格」理論、とりわけ「サド・マゾヒズムの性格」論の発想を、フロムがライヒから受け継いでいることは否定しようもない。⁽⁷⁾ こうしてフロムにおけるユダヤ教→精神分析→マ



ルクス主義という転回が行われる。「自由ユダヤ学院」でフロムを教えたことのあるショーレムは、「最後までユダヤ教正統派に止っていた」フロムが、ベルリンで会った時には、「熱狂的なトロツキストになっていた」と記しているが——そしてフロムは迷惑げにそれを否定しているが——、フロムの急激な転回⁽¹³⁾を示すものではある。

しかし何と言ってもフロムにとっての本格的なマルクス主義の理解・摂取は、フランクフルト社会研究所におけるホルクハイマー・グループとの接触によって促進され深化されたと言えよう。後年の、今日の目から見ればフロムの「ユダヤ教」「フロイト修正」「初期マルクスの疎外論への愛着」等は、いずれも、ヒューマニズムという一線に貫かれており、その点では、それぞれに対するベンヤミンやアドルノたちの理解とははじめから相容れないものを持っている。しかし当時においては、マルクス主義の「補助科学」としての精神分析に対するホルクハイマーの期待と、精神分析をマルクス主義によって「補完」しようとするフロムの要請とが、ぴつたりと噛み合ったと言うべきであろう。

2 社会研究所の発展

社会研究所の創設と経営が、フェリックス・ヴァイル(Felix Weil)の尽力によることは或る程度知られている。彼の父ヘルマンは一八九〇年、二三歳の若さで穀物輸入業者としてアルゼンチンに渡り、そこで巨万の富を築いたバーデン出身のユダヤ系ドイツ人だった。第一次大戦中はドイツの帝国主義政策に賛同し、国際的補給関係に基いて敵側の早期崩壊について予想する覚え書きをカイザーに送ったりしたが、戦後帰国、二七年に世を去るま

で、フランクフルトで手広く事業を営んでいた。故郷の祖母の下で人となった息子ヴァイルは、そういう父親への反撥もあってか、社会主義経済学を学ぶかたわら、左翼運動の活動家となり、一時逮捕されてテュービンゲン大学を除籍されたりしている。彼がフランクフルト大学に出した博士論文「社会化」は、コルシュの編集したシリーズの一冊として二二年に出版されているが、彼は革命運動の実践家にも、アカデミーの研究者にもならなかった。彼の進んだ道は、左翼的知識運動の組織者と言うより、そのスポンサーないしパトロンであり、後年いくらか自嘲的に述懐するところでは「サロン・ホルシェウイスト」とでも言うべき存在だった。

一九二二年にテューリンゲンの森の小村イルメノウで開催された有名な「第一回マルクス主義研究週間」の音頭をとり、その財政的援助をしたのは、彼ヴァイルだった。集った二〇名あまりの内にはルカーチやコルシュ、フォガラジをはじめ、後に何らかの形で「社会研究所」と関係を持つウィットフォーゲル、ポロック、マッシンク、日本ではゾルゲ事件で知られるリヒアルト・ゾルゲ、日本から留学中の福本和夫なども含まれている。これら後にはそれぞれの意味でマルクス主義理論の第一線に立つ人々も、当時はほとんど二〇歳代の若さであり、亡命中の者も含め、ひとしく不遇な地位にあった。こういう人々への援助をヴァイルは惜しまなかった。たとえばルカーチの『歴史と階級意識』を出したので名高いベルリンのマリク書店、さらに画家ケオルケ・グロッサらへも彼は経済的な援助の手を伸ばしている。おそらくヴァイル自身は、現存社会でのアカデミーの地位につくよりは、将来、それも近い将来に実現されると夢想された社会主義社会での知的リーダー、もしくは少くともその後押し役を期待していたのであろう。先の集会に参加した錚々たる少壮マルクス主義理論家たちのアカデミーでの地位は、さまざまであった。コルシュのように公然と活動しながらイエナ大学の私講師であった者、ルカーチ



のようにその知的能力を高く評価されながら——マックス・ウェーバーの尽力にもかかわらず——ハイデルベルク大学の教授資格を拒否されたままの者、ゾルゲのようにフランクフルト大学の経済学の助手を務めつつ、密かに秘密黨員として活動していた者等々。より若い世代の者たちの地位は、さらに不安定であった。そういう状況を打開するために、ヴァイルは「マルクス主義の学問的研究の制度化」を思いつく。少壮有為のマルクス主義研究者に安定した地位を与え、ソヴィエト連邦の成立に伴うマルクス主義理論の対応についての共同研究の場を提供するために、中央政府からも、そして党からも干渉されない独立した研究所を創るうというのである。このプランを抱いて彼は父親ヘルマンを説得する。大戦後帰国して、穀物取引から不動産投機にまで手を伸ばし、百万長者になっていたヘルマンは、長年放り出していた息子への罪の意識からか、息子をアカデミーの地位につけたいという欲目からか、それとも文化事業への関心からか、あるいは或る論者が憶測するように、ソヴィエト・ロシア、とくにウクライナとの穀物取引を狙ってか、その動機は知る由もないが、とにかく息子フェリックスの申し出を受け入れる。こうして「ヴァイル財団」からフランクフルト大学に、一つの研究所と、所長職の者が併任する学部教授ポストが一つ寄贈されることになり、そのために財団は、年額一二万マルクの経費を保證する基金を提供することになった。

こうして一応財政的基礎は固まったものの、いくら社会民主党の勢力下であり、ベルリンに次ぐユダヤ人口を擁する自由都市フランクフルトでも、また二〇世紀になって市民の寄附に基いて設立され、伝統的な神学部の代りに「政治・社会科学部」を置いたドイツ一のモダンでリベラルなフランクフルト大学でも、新しく創られる研究所に、マルクス主義という名前を冠することはばかられた。そこで選ばれたのが、「社会研究」(Sozialforschung)という名称である。この言葉は、アメリカ流の「社会調査」でも狭義の「社会学」でもなく、日本流に言えば「(マルクス主義的)社会科学」といった意味を持つ。少くともヴァイルがこの言葉に託した含意は、そこにあつたと言えよう。

最初研究所長に擬せられていたのは、フェヒアン協会の流れを汲む経済学者・社会政策学者ゲルラッハ(A. Gerlach)だった。第一次大戦後、彼は社会民主党左派の線で「社会政策協会」のブレインとなり、二〇年にフランクフルト大学の経済学教授に招かれてきた。そこで彼は社会主義の学問的研究のための研究所の創設というヴァイルのプロジェクトに加わり、以後この事業は二人の線で推進されることになる。ゲルラッハによれば、「社会研究」とは必ずしもマルクス主義に強調点は置かれていない。それは、「経済的基盤と法・政治的諸要素の相互作用の極度に錯綜した関係を、ゲマインシャフトとゲゼルシャフトにおける精神生活の枝葉の先まで明かにする包括的な社会生活の認識」であり、具体的には、各種の労働問題、反ユダヤ主義、ボルシェヴィズムとマルクス主義、政党と大衆、生計と人口、ドイツの窮乏化などを取り扱う。「長い間続いた認識の客観性と価値判断排除(Werturteilslosigkeit)をめぐる方法論争によって、理論研究と経験的調査の間には溝が画されてしまった。しかし現在当面する課題に対しては、両者の緊密な共働に基いて、はじめて社会生活の包括的な、しかも客観的な認識が可能になるのである。こういう課題に応じる社会研究のための研究所はいわば緊急の必要性を持ち、既存の研究施設の欠を充すものである」。おおよそこのようなゲルラッハの見解は、当時フランクフルトがそこに属していたプロイセンの、文部行政を長年にわたって主導していたベッカー(Carl Heinrich Becker)の見解とも一致するところがあった。社会民主主義者からも、その見識を高く評価されていたベッカーは、大学の教科の専門



化を憂い、新しい総合的な教科として、「科学的政治学と現代史を含む広義の社会学」を大学へ導入することを「緊急の必要事」と考えていたからである。

モスクワの「マルクス・エンゲルス研究所」をモデルに考えていたヴァイルとゲルラッハの間には、世界的にずれがなかったわけではない。しかしアカデミックなキャリアの点でも申し分がなく、一般に「名門コミュニスト」と見なされ、文部当局の受けも悪くないゲルラッハが新しい研究所の所長に擬せられるのは当然の成り行きだったろう。しかし彼は一九二二年一〇月、当時は死病だった糖尿病のため、三六歳の若さで急逝する。計画の一頓座である。すでに新しい研究所創設のプロジェクトに私的に参画していたとはいえ、二三年度のフランクフルト大学の精神科学・社会科学領域での博士論文首席合格者、ホルクハイマーとポロックはまだ若い。窮余の策としてヴァイルが白羽の矢を立てたのが、ウィーン大学の老大家カール・グリュンベルクであった。

ルーミアニア育ちのユダヤ系オーストリア人であるグリュンベルクは、早くから東欧における農民解放史の研究等で頭角を現し、在野の研究者が多い中で、数少ない「講壇マルクシスト」として知られていた。こういう彼のキャリアは、アカデミーに附属する研究所の所長として承認を得やすかったのであろう。彼の学风は、彼が主宰した時期の研究所の紀要『社会主義と労働運動の歴史研究』(通称グリュンベルク・アルヒー)という題名が示すように、労働運動を介しての社会主義社会への移行過程の歴史的研究であり、就任講演で熱っぽく訴える彼のマルクス主義的世界観とは、そういう漸進的移行を「進歩」と評価し、実現可能とする信仰告白以上のものではなかった。したがって、三〇年まで続く同紀要の末期に現れる若い世代との間には、或るずれがあることは明かだった。それにしても、それまで私的な研究会などでの議論をリードしていたとはいえ、研究所の運営にはタッチ

していなかったホルクハイマーが、二八年以降病弱のグリュンベルクに代って所長代行になり、三〇年以降正式に所長に就任することは、二〇年代の旧所員にとっては意外性を持った飛躍として受けとめられたらしい。その飛躍とは、所長職が社会科学系から哲学系へ移ったということであり、また時代経験を異にする世代、第一次大戦後に活動を開始する若い世代に主導権が移ったことを意味する。思想的には、それはむしろ当時の第二インターに集約される実証主義的マルクス主義理解とは鋭い対照をなすルカーチ、コルシュら、いわゆる「西欧的マルクス主義」における「マルクス主義の再哲学化運動」の線に連なるものだった。けれども社会研究所の二〇年代から三〇年代への質的転換を、単純に「再哲学化」という形で割り切ることには問題があるように思われる。

フランクフルト学派の知的系譜を尋ねる場合、メルロー・ポンティ以来呼び慣わされている「西欧的マルクス主義」の流れの中にそれを位置づけることは、むしろ誤りではない。とりわけ二〇年代のカール・グリュンベルクが所長だった頃の社会研究所と、三〇年代以降ホルクハイマーの指導下に入って以後との質的な差異を際立たせるには、それは有効な特徴づけと言えよう。グリュンベルク路線が、当時のマルクス主義的科学研究の実証主義化という一般的趨勢の中で、社会主義社会への進歩の歴史的研究という課題の中に、オプティミスティックな世界観と素朴な方法意識を持っていたのに対して、ホルクハイマー以後の世代は、「主体と客体との相互作用」としての歴史の弁証法的把握に基いて、意識の「物象化」(Verdinglichung)の主体的廃棄をめざすルカーチらと、切迫した危機意識を共有していたからである。

けれども、その後のフランクフルト学派の展開は、二重の面でルカーチから離れていく。第一は、主としてアトルノによるルカーチへの直接の批判である。彼は三〇年代以後のルカーチの「強請された和解」や「理性の崩



ERICH FROMM

「墟」に見られるようなあからさまな図式的裁断に関してだけでなく、深い影響を受けた『歴史と階級意識』においてさえ、プロレタリアートの階級意識が「主体と客体の同一性」として聖化されている点を、「フィヒテ的觀念論への後退」として批判するようになる。第二の面は、こういうアドルノの「非同人性」の哲学が陥るアポリアを、七〇年以降のハバーマス以下の若い世代が批判しながらも、もはやルカーチラの「マルクス主義の再哲学化」運動に帰るのではなく、むしろ初期ホルクハイマーの「学際的唯物論」のプロジェクトへ結びつこうとするところに見出される。

こうなると、二〇年代の社会研究所と三〇年代のそれとの質的差異を、「実証主義的マルクス主義から西欧的マルクス主義へ」という形で特徴づけるやり方は、じつは六〇年前後の「実証主義論争」における反実証主義的傾向からする一面的強調ではないか、という反省が起ってくる。

たしかに実証主義批判という課題は、フランクフルト学派のほとんどすべてのメンバーに通じる中心的モチーフだった。しかしその場合、実証主義批判とは、実証主義に伴う「哲学(形而上学)と科学との機械的な二分法」、「価値否定もしくは価値問題の回避」、「専門的分化による視野の狭隘化」、その結果としての「現状肯定」等、おしなべて、実証主義のイデオロギー性への「イデオロギー批判」であって、けっして個別科学の成果や経験的方法の否定ないし軽視に通じるものではない。この点は——人により時期により差があるとはいえ——、初期ホルクハイマーにおいてとくに強調されているところである。

たしかにホルクハイマーは、一面では、個別科学的研究の実証主義的イデオロギー化への批判規準として、またそれに方向と目的を示すものとして、個別科学に対する哲学の優位を確信しているように見える。社会哲学と

は、彼によれば、新カント流派に区分された一文化領域に関わるものではなく、カントやヘーゲルの伝統を継いで、「人間のあるべき理性的状態」という「理念」を掲げ、それに基づいて、またこの点ではヘーゲルに反して、その理念が現実にはまだ実現されていない点を批判することを本務とするものであった。しかし哲学はもはや諸科学の「総合」とか、歴史についての「全体知」を与えることはできない。したがってどうしても哲学と個別科学との相互批判・相互共働が必要になってくるのである。

ホルクハイマーにおける理性理念の強調や哲学の優位の主張は、必ずしも一義的ではない。学際的共同研究とは、個別科学相互の共働なのか、哲学と個別科学との共働なのか。その場合批判的機能を持つのは哲学だけで、個別科学(経験的社会調査)狭義の「社会研究」は中立的なものなのか。それとも両者の共働が、はじめて批判的機能を持つことになるのか。

ここでは哲学と個別科学との関係を一般的に論ずることはやめて、現実にはホルクハイマーにおいて、「社会哲学」と狭義の「社会研究」との共働が、どのような形で行われたかに注目したい。その場合関心の的となるのは高唱された社会哲学の理念についての言説ではなく、現実に行われた社会研究の共同プロジェクトにある。その点では就任講演(三一年)の後半、「社会研究」誌一・二合併号(三二年)の序文等が手がかりになるが、まず、それ以前(二九年)に着手されていたフロム¹⁰の経験的研究、労働者の意識(強調して言えば無意識)調査を取り上げること¹⁰にしよう。



三 フロムと社会研究所の共働

1 ドイツ労働者の意識調査

フロムがそれまでも共働していた社会研究所に正式に社会心理学部門の責任者として参加するのは、一九三二年からである。以後彼は、三二年から『社会研究』(Zeitschrift für Sozialforschung)誌と改名して新しく発刊された研究所の機関誌に、「分析的な社会心理学の方法と課題について——精神分析と史的唯物論」「精神分析論的性格とその社会心理学的意義」(三三年)、「プリフォールトの母権制論」(三三年)、「母権制理論の社会心理学的意義」(三四年)、「精神分析療法の社会的制約性」(三五年)、「無力感について」(三七年)、などのユニークな論文を陸續と発表し、三六年に出た研究所の共同研究の大冊『権威と家族』でも、その中心部分をなす社会心理学部門を執筆しているのだが、ホルクハイマーの学際的唯物論プロジェクトにおける経験科学との共働という理念をもっともよく実現したものの、というよりそういう理念の発想そのものを支えたものは、フロムらによる「ドイツ労働者の意識調査」^[1]の共同研究だったであろう。

もともと「過去および現在における労働者階級の状態」の研究は研究所の積年の課題だった。ヴァイルは二九年一月一日付けの文部大臣あて書簡で、現在進行中の「主だった労働者と給与生活者の各層の物質的精神的状态」についてのこの研究は、「入手しうるすべての資料・記録だけでなく、包括的な独自のアンケート調査を行っており、その実施に当たっては指導的な労働組織と専門家の協力を得ている」旨を報告している。したがってこ

の研究が、フロムの研究所正式加入より前から企画されていたことは明かであるが、それ以前の「精神分析研究所」時代からフロムがこの研究に加わっていたこと、実質的には、むしろフロムによって問題構成や方法が立案されていたことは推測に難くない。社会研究所側は資金とともにヒルデ・ヴァイスという調査専門家を提供し、フロムが理論仮説と解釈・分類を分担するという形で、ワーキング・グループの共同作業が行われたと考えられる。

基本的な問題意識は、イデオロギーとパーソナリティの結びつき方を問うことにあった。そのために作られた仮説モデルは、保守主義、自由主義、社会主義という政治的イデオロギーが、それぞれ「権威主義的・マゾヒズム的」「アンビバレント」「性的・革命的」という性格類型に対応するのではないか、というものだった。こういうフロイト的用語と仮説構成は、当時のフロムが持っていた問題意識、とくに彼がベルリンで接触したヴィルヘルム・ライヒの「性格分析」論の影響抜きには考えられない。調査の方法としては、精神分析療法の中で発達した面接法が考えられたが、資金的にも不可能だったので、アンケート方式をとることにし、それも無作為抽出法ではなく、人づてに配るといやり方をとらざるをえなかったが、それでも面接法の利点を生かすために、○×式ではなく「自由記述式」をとって「解釈的分類」の余地を残すことにした。二七一項目にのぼるアンケートは、たんに意識的に表明される意見だけでなく、無意識的な態度を含めて、可能なかぎり包括的な把握をめざしていた。

主として労働組合の役員の手を通してライブラントの組織労働者に配られた三三〇〇通のアンケートは、三一年までに回収されたが、回収率は約三三％で、数多い質問項目の中には無回答のものも見出された。この実験的



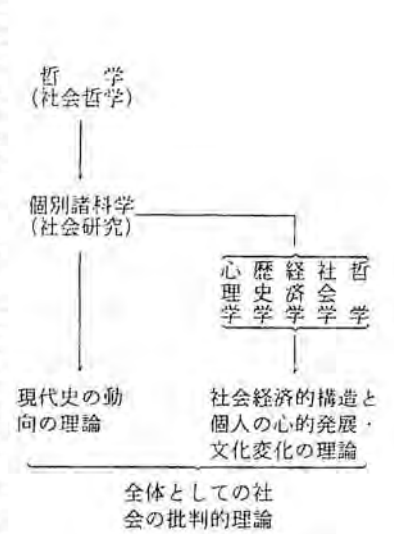
な調査が、後のより洗練された調査技法からすれば、その客観性と統計学的正確さの点で多くの不備を持つことは否定できない。しかし量的な分析よりは質的な分析を、記述的調査よりは解釈的調査をめざすフロムにとって、数字よりは「傾向」が大事だった。フロム自身は、三一年から三二年にかけて——フリーダとの離婚が隠れた原因とも言われる——結核療養のため、ダヴェオスのサナトリウムに入らざるをえなかったこともあって、集計結果の整理ははかばかしくは進まなかった。しかし資料はまずジュネーヴの支所に、そしてアメリカへと持ち出されて、分類作業が続けられた。もともと問題になったのは「社会主義的・反権威主義的」という類型の統一性だった。理想社会や政党支持を問う質問には左翼的回答をしながら、崇拜する人物とか子供への体罰などの問いには権威主義的回答をする者が多かったからである。そのため「隣人」に対する態度を加味したり、革命と反抗 (Rebellion) とを区別したりする操作を加えながらようやくまとめられた結果明かになったのは、「表明された (意識された) 政治姿勢と潜在的な (無意識的) 性格構造との乖離」という問題だった。たとえば左翼政党の党員のうち、反権威主義的性格を持つ者は一五%にすぎず、二五%は何らかの意味で権威主義的性格を示したのである。この結果は、政治的イデオロギーとパーソナリティ類型の関連についての最初の仮説を裏切るものだった。たとえ左翼政党への支持を表明していても、自立した「性的性格」をもって、権威主義的なナチスを阻止する行動に出る者は少いことが立証されたからである。この調査が行われた翌年、一九三〇年の総選挙では、共産党は少数を増したものの社会民主党は激減し、ナチスは大躍進を遂げた。しかしこの時点での選挙結果にかかわらず、労働者階級にナチスに抵抗する活力がないことは、この調査によって、すでに予告されていたと言わなければならない。一九三〇年九月のこの選挙結果を前にして直ちにヴァイルは、ホルクハイマー、ポロック、レーヴェンタール

を呼び、来るべきナチスの征覇に備えて、いち早く研究所の資産と資料をジュネーヴ、ロンドンなどへ分散して疎開するよう指示する。三三年春政権を獲得したナチスによって、研究所が「反国家的」の故を以て閉鎖させられた時、比較的無傷で海外へ脱出できたのは、その先見の明による。

2 ホルクハイマーの共同研究構想

後に「学際的唯物論」と呼ばれるようになる初期ホルクハイマーの構想の中で、学際的とはどのような意味で言われているだろうか。それは横と縦という二重の面を持っている。まず横の関係では、学際研究とは、「社会研究 (経験的個別研究)」「レベルで成り立つ哲学・社会学・経済学・歴史学・心理学とが共働するかに興味をそそられるが、という組み合わせの下に (たとえば後にふれるように歴史学と心理学とが) 共働するかに興味をそそられるが、こういうレベルでの共働の要請は、現今ではむしろ流行するほど自明のものであり、とりたてて取り上げるまでもなからう。問題はむしろ縦の関係、つまり哲学と個別科学、とくに、社会哲学と社会研究との共働であろう。この場合哲学は個別研究の認識成果を総合して普遍化をはかるものとしてでなく、「問題設定者」という地位を与えられている。アクチュアルな時代体験の地平から提起された哲学的問題に対して個別諸科学が答えを出し、それに応じて設問そのものか修正され、そういう「応答の弁証法的過程」を通じて、歴史過程の中で、認識が進行してゆく。そのめざす所は、「現時期における歴史的動向の理論」(die Theorie des geschichtlichen Vorlaufs der gegenwärtigen Epoche) である⁽¹²⁾。これを図示すれば次頁の図のようにならうか。この場合、たとえば「精神と物質」といった伝統的哲学の設問は、「上部構造と下部構造」という変形をへて、「個別諸科学の洗練された科学的





方法」によって、さらに「社会経済的構造と個人の心的発展・文化変化との関係」を問う問いに組み変えられ、「現代史の動向の理論」と合体して、「全体としての社会についての批判的理論」へと収斂してゆく。⁽¹³⁾

ここにいささか形式的に図式化して取り出されたホルクハイマーの学際的唯物論の構想を見れば、三〇年をめぐる社会研究所の質的転換の意味もおのずと明かになってくる。

内面的には、人間の避けがたい苦悩というショーペンハウエルのペシミズムから出発した少年ホルクハイマーが、それを「生への意志」、さらに「認識への意志」へ転換させることによって研究者として自立した時、彼の認識関心は、現代における人間の苦悩の源泉としての物質的諸条件の科学的認識へ向かい、その実践的関心が、そういう物質的諸条件の変革と止揚に向かうのは、当然であろう。そういう意味での苦しみや不幸からの人間の

解放を、彼は理性の実現という旗の下に要求しているのである。ここにホルクハイマーの、いわば「理想主義的マテリアリスムス」がある。

学際的社会研究の組織者として——そこに彼の真骨頂があると思われるが——ホルクハイマーがとくに注目したのは、社会経済的の下部構造と思想的文化的下部構造の「心理的媒介項」の設定であり、心理学と歴史学の共働であった。その観点から彼は「歴史の要求に答える心理学」として、フロイトの精神分析に注目している。おそらく三〇年をめぐる研究所の質的転換の眼目は、たんなるマルクス主義の「再哲学化」よりは、むしろ社会研究への精神分析の導入にあったのではなからうか。しかもそれはまたたんなる方法論的レベルに尽きない意味を持っていた。

問題提起が哲学者の役目であるとしても、それは何も専門哲学者である必要はない。またその設問は伝統的哲学の問いの継承である必要はない。彼の問いは必ず彼の時代体験に根ざしている。その意味でホルクハイマーの社会研究への精神分析の導入は、どのようなアクチュアルな時代体験に根ざしていたのか。端的に言って、ヴァイル、グロスマン、ポロックら二〇年代の研究メンバーにとっては、ロシア革命の成功後におけるマルクス主義理論の対応か問題だった。それに対してホルクハイマー以下の新世代の問題は、ドイツ革命挫折後におけるマルクス主義理論の対応であった。その置かれている社会経済的条件からすれば、当然革命に立ち上るはずの労働者階級が立ち上らず、むしろナチスに流れてゆくのは何故か。そこには従来の経済決定論や階級意識論では説明しきれない別の要因、おそらくは心理的要因が働いていたのではないか。二〇年代末の研究所紀要の広告によれば、グロスマン、ウィットフォールゲルに次いで、ホルクハイマーの著書の発刊が予告されているが、その題名は



『マルクス主義の危機』となっている。この本は予告にもかかわらず遂に発刊されなかった。その理由は知る由もないが、迫りくるナチスの征服に備えて始められた亡命の準備、それに続く新しい機関誌『社会研究』の発刊等の仕事に忙殺されたこともあるが、一つには、実践主体としてのドイツ労働者階級の崩壊という状況に直面しての新しいアプローチという面では、ホルクハイマーよりはフロムの方が先行していたからであり、彼はフロムをバック・アップしつつその課題をフロムに任せて、自分自身は、階級の実践主体を欠いたままでの理論主体のあるべきあり方の模索へと、方向を変えてゆかざるをえなかったからだと思われる。その成果は——実践への或る断念に基く——三七年の論文「伝統的理論と批判的理論」となって結実することになる。

四 傍流としてのマルクラーゼとアドルノ

一九三〇年という年は、経済的には前年のウォール街に端を発した世界的大恐慌の波がドイツにも押し寄せ、それを反映してか、政治的には、ナチスが議会の第二党へ大躍進を遂げながらも、文化的には、フロイトがフランクフルト市からケーテ賞を授けられるなど、ヴァイマル文化の余業がなお残光を輝かせている、という状況にあった。そういうただならぬ雰囲気の中で、名実ともにホルクハイマーの指導下に移った社会研究所は、先の共同プロジェクト・プランに基いて、哲学・経済学・社会心理学・文化論という四部門構成で出発した。担当は、哲学リホルクハイマー、経済学リグロスマン、ポロック、社会心理学リフロム、文化論リレーヴェンタールである。このうちグロスマン、ポロック、レーヴェンタールは、教授なり助手なりの資格ですでに研究所のメンバー

だったから、発足に当ってホルクハイマーが招致したのはフロムだけということになる。正式メンバーとしてマルクラーゼが加入するのは、三三年スイスに亡命して以後であり、アドルノに至っては、三八年アメリカではじめて加入を認められる。こういう加入の順序は、種々の事情がからむにせよ、少くとも三〇年代初頭という時点で、これらの人々に対する評価と信頼の度合いを示しているように思われる。次にその顛末を追ってみることにしよう。

1 マルクラーゼ

メンバーのほとんどすべてが、ホルクハイマーのインナー・グループに属するか、あるいはその誰かの紹介を通じて加入しているのに対して、マルクラーゼだけはまったく別の人脈に属する。彼を推してきたのは、当時フランクフルト大学の事務局長であり、古代哲学の名譽教授だったリーツラーだった。彼は外務省の政治顧問として、ミュンヘンのレーテ共和国への軍事介入を主張したり、月刊誌『ドイツ国民』の編集をしたり、三〇年のフロイトのゲーテ賞授賞に執拗に反対したりした男だが、ハイデガーと親しく、彼をフランクフルト大学へ呼ぼうと画策したりしたこともあるらしい。この「リーツラーが推してよこしたハイデガーの弟子」マルクラーゼを採用する気は、少くとも三一年段階では、ホルクハイマーにはあまりなかった。⁽¹⁴⁾一八九八年ベルリンのユダヤ系実業家の家に生れたマルクラーゼは、ドイツ革命時の社会民主党の態度に失望して学究生活を志し、当初はドイツ文学を専攻してフランクフルト大学での博士論文は「ドイツ芸術家小説」⁽¹⁵⁾に関するものだった。これは初期ルカチの『魂と形式』『小説の理論』の決定的影響下にあり、「理念への形而上学的憧憬とその実現」とか「全体性の喪



失」「生の形式の統一」といったルカーチ的用語や発想に溢れている。一九二八年『存在と時間』に感動したマルクーゼは、フライブルクのハイテガーの許で哲学の研究に打ち込むことになる。このようにルカーチとハイテガーの影響下に出発した初期のマルクーゼの思想は、後年ハバーマスによって、サルトルの実存主義的マルクス主義の先駆と呼ばれるような傾向を帯びていることは或る程度知られている。サルトルの事はこの際除外するとしても、二八年に『哲学雑誌』の「存在と時間」特集号に発表された処女作「史的唯物論の現象学のために」から、三二年の教授資格請求論文「ヘーゲルの存在論と歴史性理論の基礎づけ」に至るまでのマルクーゼの一連の仕事は、ルカーチとハイテガーを結ぶ線に、「市民的哲学の原理的止揚」の可能性を認め、それを「具体化」しようとする動機に貫かれていた、と言ふことができよう。その旗印は、二九年の論文の表題にされた「具体的哲学」であるが、それはまず、人間存在が本来的に歴史的存在であるという事実性から出発し、「決断主義」的に理解された「理論に対する実践の優位」の主張によって、歴史存在論を具体化し、歴史の根本的変革をめざそうとするものだった。教授資格請求論文である「ヘーゲルの存在論」には、もちろんこういうラディカルイズムは表面に出ていないが、ハイデカーはこの論文を受理したまま審議せず、やがてマルクーゼはユダヤ系マルクシストとして、アカデミーへのコースを断念する。

こういうマルクーゼを、フランクフルト大学の事務局長であり、フロイトのゲテ賞授賞に反対したり、右翼的傾向を持つリーツラーが、なぜホルクハイマーに推薦したかはよく判らないが、ハイテガーのフランクフルト大学への招致運動を進めていたリーツラーとハイテガーとのコンタクトが、そこにあずかって力があつたことは、充分に考えられることである。だがここでの問題は、三一年段階では「ハイテガーの弟子」マルクーゼの採用に乗り気でなかったホルクハイマーが、どのような経緯で三二年にはレーヴェンタールをマルクーゼに接触させ、三三年には、社会研究所に迎え入れるようになったか、という点である。

まずリーツラーの圧力ということが考えられるだろうか。ドイツの大学は、日本の国立大学の教授会が持つような独立した人事採用権を持っていない。だからフランクフルトの社会研究所より、やや早く創設されたケルン大学附属の「社会学研究所」では、リベラル派のルネ・ケーニヒとバランスを取るために、時のケルン市長コンラート・アテナウアーが、カトリック系のマックス・シェーラーの教授採用を要求するというような事も起る。しかしケルンの場合と違って、財政上相対的に自立していたフランクフルト社会研究所では——たとえ以前から研究所人事の左派偏向か問題視されていたとはいえ——所長であるホルクハイマーが、自らの意志に反して、事務局長の圧力に屈するなどということはまず考えられない。

むしろ消極的には、当時のホルクハイマーは——後年、六三年だったと思うが、筆者も出席していたゼミの席上で「存在論的詐欺師」などという激しい言辞をハイテガーに関して投げつけるようになるが——少くとも、三年の総長就任演説以前の段階では、ハイテガーに一定の敬意と期待を抱いていたという事もあつた。いわば、「ハイテガーの弟子」でもよかつたのであろう。

しかし積極的には、ホルクハイマーは、ハイテゲリアンとしてではなく、マルクシストとしてマルクーゼを見直したと言うべきであろう。そういう再評価のきっかけとなつたのは、おそらく三二年に出た前記『ヘーゲルの存在論と歴史性理論の基礎づけ』であり、また同年『ケゼルシュフト』誌に発表された論文「史的唯物論の基礎づけの新資料」だったと考えられる。後者は新しく世に出たマルクスのバリ時代の「経済学・哲学手稿」のもつ



とも早い紹介・解釈であり、人間の疎外という概念に基いてマルクス主義を再構成する可能性を開く上で、新鮮な刺激として迎えられた。当時みずからは「市民的人間学のポテンシャル」(モンターニユの懐疑、ショーペンハウエルやニーチェの「意志」等)に依拠しつつも、学際的唯物論の共働に基く新しい「現代史の動向の理論」の組織化の可能性を模索していたホルクハイマーにとって、こういうマルクラーゼの仕事は、二〇年代の研究所の旧世代が捉われていた経済史的説明という枠を超える史的唯物論の新しい哲学的基礎づけとして、あるいは少くとも共同研究の一翼を担うものとして、期待されたであろう。ホルクハイマーが研究所の哲学部門にアドルノでなく、マルクラーゼを招く気になったについては、こういう積極的な期待があったことだと思われる。

この期待が高されたかどうか。一九四〇年の段階でホルクハイマーがニューヨークの社会研究所を閉鎖してカリフォルニアに隠棲し、理論的著作に専念しようとした時、最初に共同著作の相手として考えたのは、アドルノではなくてマルクラーゼだったと言われているから、信頼関係が続いていたことは確かだろう。しかし三〇年代の初期批判理論におけるマルクラーゼの位置は、どちらかと言えば附随的なものだったと思われる。本稿の主題である精神分析との関連で言えば、この時期には、マルクラーゼの関心はフロイトにはほとんど向けられていない。三六年の研究所の記念碑的な共同研究の成果『権威と家族』においても、たしかにマルクラーゼは、その哲学部門を執筆してはいるか、それは哲学史上における家族学説を列挙するに止まり、精神分析を歴史動向の説明に応用するという「権威主義」研究全体を貫くホルクハイマー・フロムの方法や動機は、ほとんど生かされていない。このことは、マルクラーゼの専門領域が哲学であって心理学ではない、といった役割分担や、彼の主要関心が、フライヤーやマンハイムら当代のイデオログへの理論的批判にあったという関心方向の差などに尽きない、もつ

と大きな意味を持っていたと考えられる。フロムの権威主義研究の方法的核心は、社会経済的構造と個人のリビドー構造、意識(イデオロギー)と無意識(パーソナリティ)の結節点として家族に注目し、「超自我」を育成する家族の媒介機能を説明することにあった。当時は権威主義研究に懐疑的であり、それにまったく参加していないアドルノにおいても、三〇年代の音楽論の主題は、自立的と見える芸術作品が、どのようにして「全面的に拮抗し敵対的に迫ってくる社会」(die antagonistische Totalität)に媒介され規定されているかの説明だった。それに対してヘーゲルの歴史存在論をハイデガーの実存の歴史性によって捉え直し、決断主義的な実践の優位に結びつけるマルクラーゼの理論には、具体的媒介の説明が欠けている。その意味では、マルクラーゼの「具体的哲学」は抽象的である。このことは早くから研究所のメンバーにも意識されていた。アドルノはいち早く『社会研究』誌、第一巻の書評欄で、マルクラーゼの『ヘーゲルの存在論』を取り上げ、その歴史性概念の抽象性を批判している。¹⁹⁾

もし初期批判理論の、ホルクハイマー・フロムを中心とする、共同プロジェクトの中心が、古いマルクス主義の上部・下部構造図式や、さらにはルカーチの——それ自体は正しい——主体・客体の交互作用の弁証法が陥った階級意識の理念化をも批判して、上部構想と下部構造、主体の意識と無意識とを、屈折した形で媒介している大衆心理や大衆文化の具体的説明——それは労働者階級がもはや革命の主体ではありえないという現実に直面してのマルクス主義理論の再編制という動機を持っている——にあるとすれば、マルクラーゼの抽象的な「具体的哲学」か、その傍流に立つことは当然とも言えよう。だが傍流にいたのはマルクラーゼだけではない。彼を批判したアドルノも当時はやはりそうであった。



アドルノの精神分析ないしフロイトへの関心は、かなり早い。彼が一九二七年(つまり彼の二四歳の時)に書き上げた最初の教授資格論文は「超越論的心理論における無意識の概念」と題するものだった。⁽²⁰⁾ここで使われている「無意識」意識されないもの「Das Unbewusste」という概念は、明かにフロイトを踏まえている。けれどもそこで取り上げられているフロイトの著作が『精神分析入門』一冊だけに限られている点からも判るように、この論文はフロイト研究を主題とするものではない。むしろ彼の指導教官であったハンス・コルネリウスの哲学の祖述ないし要約に近い。この傾向は、二四年に書かれた彼の学位論文「フッサールの現象学における物的なものとのエマ的なものの超越」以来一貫している。コルネリウスは、新カント派の認識論と、当時の経験的心理学を結合させ、人間と自然とを含む「存在の理論」(Seinlehre)という形で、いわば意識領域の拡大をはかろうとする「超越論的リアリズム」の立場に立っていた。⁽²¹⁾アドルノがこれに一応の共感を示すのは、そこに主観主義を超える「客観への突破」を期待し、観念論を超える方法を模索していたからであろうが、しかし彼の理解によれば、精神分析とは、「意識されていない事実を単純な想起に還元すること」であり、「意識の内在」を超えるものではない。⁽²²⁾「日常生活の精神病理」を手がかりとしたこういう解釈は、シャイブレが指摘しているように、無意識の意義の強調よりは、むしろ無意識の呪力剥脱(Entzauberung des Unbewussten)の方向に展開されている。⁽²³⁾こういう解釈に基づいて、この論文の最終章では——いささか唐突に——「社会的現実における理論の機能は常にそれ自身社会的である」とか、「現代哲学における無意識の概念の積極的意味は、社会的現実そのものに矛盾する」と

いったテーゼが現れる。これはいわば「超越論的心理論からイデオロギー批判」への、コルネリウス流に理解された「精神分析」から「社会批判」への転回である。そこには明かにホルクハイマーの影響が認められよう。

アドルノはこの論文を正式には提出しなかった。受領される可能性があるかどうかを判断して欲しいと言って指導教授であるコルネリウスに預けたのだった。畏友ベンヤミンの卓抜な教授資格論文「バロック悲劇」論が二五年に空しく不合格となり、アカデミズムへの道を閉ざされたのを知っていたからである。コルネリウスは選考委員会に推薦状をつけて廻す代りに、黙って論文を返してよこした。委員会メンバーの一人への私信の中で彼は言っている。「この論文は、多言を弄して飾り立てられてはいるが、彼がこれまで発表してきたことをおそろしく単純化した焼き直しにすぎません」。⁽²⁴⁾この批評は、論文の前半については当たっていないことはない。しかしコルネリウスを硬化させたのは、むしろ最終章のイデオロギー批判の部分だったのではなからうか。それは彼の焼き直しと言うより、むしろ彼の意識哲学への訣別を告げるものだったからである。

二五年に学位論文を仕上げるや、オペラ「ウォツェック」に感動したアドルノは、直ちにウィーンに赴いて、ヘルクのもとで作曲法と音楽理論の勉強に打ち込む。すでに学生時代から各種の雑誌に音楽評論の健筆を揮っていたアドルノにとって、哲学論文を書くことは、いわば片手間の、アカデミーに籍を置き、資格をとるための、義務にすぎなかった。音楽の面では、学生時代から、あらゆる伝統的形式からの離脱を決意していた彼が、哲学の面では、いせん講壇哲学の伝統的スタイルに止っていたのは、その故だったろう。二八年にベルクのもとから帰ってきた後も、彼はヘルリンにしはしば出かけて、音楽批評で身を立てようとさまざまな努力をしている。

そういう彼を、もう一度、哲学の教授資格論文を書く気にさせるきっかけとなったのは、二八年に、コルネリ

ウスの定年退職後、急死したマックス・シェーラーの後を継いでパウエル・ティリッヒが哲学講座に赴任してきたことであろう。ティリッヒは前任校マールブルク時代のハイデガーの仲間として「弁証法神学」の一翼を担うとともに、当時「キリスト教社会主義」の左派の線で活躍していた。彼のもとでアドルノは再度教授資格論文作成に挑戦する決意をする。その成果が、三〇年に資格審査を通り、加筆修正されて三三年一月三〇日(ナチスの政権奪取の日)に公刊された『キルケゴール——美的なもの構成』である。これまでに二〇代に彼は一〇〇篇に及ぶ音楽評論を書いているが、哲学関係で公刊されたのは、これが処女作である。

アドルノの二つの教授資格論文を比較してみる時、前者がコルネリウスの、後者がティリッヒの、影響下に書かれたというふうには割り切れることはできない。後者が、ティリッヒよりはベンヤミンの、とくにその「パロック悲劇」論の圧倒的影響下にあることは歴然としている。こういう形で二つの論文の間に飛躍が認められるとして、問題はそこにどういう連続と非連続の契機が働いているかである。より具体的に言えば、第一論文の末尾にあったホルクハイマー流の「イデオロギー批判」ないし「超越論的リアリズムから唯物論へ」という転回方向が、第二論文の中で、どう展開され変容を蒙っているかが問題となる。

『キルケゴール』では、イデオロギー批判、ないし社会批判という要素は、一見したところ、表面には現れていない。しかしアドルノのキルケゴールに対する基本的構えは、当時の実存哲学的解釈と対立してルカーチに負っているように思われる。それも『魂と形式』におけるキルケゴール論だけでなく、『歴史と階級意識』におけるルカーチに。つまりアドルノは、主体(精神)と客体(自然)との相互作用という次元に成り立つ唯物弁証法の立場に足を置いて、「たんなる主観内面的な」キルケゴールの弁証法を批判しているのである。こういう視点から

見れば、キルケゴールは、精神分析と同じように、「人間を全き自己内在性において捉える」内在哲学(Innerenphilosophie)の限界内に止まっていることになる。⁽²⁵⁾ここから主体と客体(内面性と外界)の非同一次性に基いて、「主体性が真理である」というキルケゴールの基本命題に疑義が申し立てられる。こういう発想が、暗黙のうちに或る種の唯物論的志向を持っていることは明かであるが、彼は特定の既成の唯物論的立場を前提して、そこから意識内哲学を裁断しているわけではない。キルケゴールにおいては、本来の「客観的形象は、彼の主観主義の圧力の下で、メタファーへと蒸発させられている」⁽²⁶⁾。そういう蔽いと呪縛を剥いて本来の姿に戻してやることかめざさるべきなのである。そのためにはベンヤミンの「アレゴリー解釈」が有力な方法となる。それを通じてアドルノは、キルケゴールのうちに「唯物論の萌芽」を、つまり「主体内面的弁証法」とは別種の「主体と自然との和解」の弁証法を、読みとっている。

「自己内在性」の立場を、人間の「物象化」され「疎外」された状態と考へ、「内面性の社会学」によって「内在哲学」を超えようとする作業は、明かに第一論文末尾のホルクハイマー流の社会批判、イデオロギー批判の継続・展開と見ることができよう。しかしテキストの微妙な「アレゴリー解釈」を通じて、「絶望の客観性」の背後に、希望の痕跡を垣間見ようとする手法は、ホルクハイマーとは別の、ベンヤミンの影響抜きには考えられない。

アドルノの第二の教授資格論文に見られるのは、第一論文の末尾に見られるホルクハイマーのインパクトを受け継ぎながらも、その直接の延長線上にはなく、むしろそれとは一線を画して、ベンヤミンの圧倒的影響下に自己独自の哲学を確立していることとする姿勢である。こういうホルクハイマーとの差異は、三一年五月に行われ



たアドルノの講師就任講演「哲学のアクチュアリティ」と、同年一月に行われていたホルクハイマーの、前述した社会研究所長就任演説とを比へてみる時、歴然としてくる。そこでアドルノは、同時代のすべての哲学を批判しつつ、ベンヤミンを参照しながら言っている。今日、哲学は「思考の力で現実をあまねく全体として捉えること」ができるという幻想」を断念する所から出発しなければならぬ。そういう哲学の課題は「解釈」(Deutung)に求められる。それは本来「調査」(Forschung)を任務とする個別科学の成果を、現実として受けとって、普遍化をはかるのではなく、むしろ「記号」として受けとって、それを「解釈」する。しかも、現実の中に隠されている既存の「意図」(Intention)を探り出すことではなく、「意図なき」(intentionlos)「現実」の解釈が問題なのだ。こういう時アドルノが言う「意図」(Intention)とは、神学的「意味」でも現象学的「志向」でもなく、むしろヘーゲル的な、理性の実現をめざす歴史の意図をさしているだろうか。そういったアドルノの「解釈的哲学」は、体験―表現の意味連関に定位する「解釈学的哲学」とは違って、「個々ばらばらな現実の諸要素から、さまざまな形象」(Figuren)やイメージ(Bilder)を——つまり状況(Konstellation)を——構成することによって、「個別科学が設定する」問いの廃棄(Aufhebung)」をめざす。こういう「謎」としての現実の再構成と、その「謎解き」(実践による問いの廃棄)との弁証法的関係のうちに、彼はさりげなく、自分の「解釈する哲学」と「真の唯物論的哲学」との「類縁性」を指摘している。こういう哲学は「思考の万能」(ラロイト)ではなく、「想像力」に訴え、形式的には「エッセー」という形式になじむ。今日の哲学はもはやかつてのような大哲学の相貌を備えてはいない。しかし「精神は現実の総体を作ることも把握することもできないかもしれないが、微小なものの中に入りこみ、微小なものの中で、たんに現存するだけのものを破壊することができるだろう」。

こういうアドルノの主張と、同じ年に行われていたホルクハイマーの「学際的唯物論」に基く社会研究の組織化構想との間に、或る疎隔があることは明かだろう。

ホルクハイマーは、一九三〇年代初頭の社会研究所の再組織に当って、年来の友であり密接な連関を保っていたアドルノを——彼の熱望にもかかわらず——正式所員として加入させることを認めなかった。その理由は、一つには裕福なワイン商を営むヴィーゼンブルント商会の御曹子に、経済的援助をする必要はない、と考えたかもしれないが、一つには、ベンヤミン色の濃いアドルノの「解釈哲学」に、ホルクハイマーが危惧と不信の念を持っていたこともあつたらしい。ベンヤミンの「パロック悲劇」論を不合格とした選考委員会のメンバーには、私講師ホルクハイマーも名をつらねていたのである。さらにもう一つ、ホルクハイマーのプロジェクト構想においては、精神分析との共働は、不可欠の柱であった。フロイトを依然「意識内在主義」としてネガティブに評価するアドルノには、その可能性を認めがたかった。フロムやレーヴェンタールを「職業的ユダヤ人」(Bevul's)として白眼視していたアドルノを加入させることは、この二人を失うことになりかねなかった。こうして新しい社会研究所は——終始会計担当だったポロックを別にすれば——、ホルクハイマー、フロム、レーヴェンタールというフランクフルト学派の「精神分析グループ」を中軸として結成されることになった。

3 フロム対アドルノ

このように、三〇年代初頭の社会研究所の発足当時、ホルクハイマーのプロジェクトの中で中心的な地位を占



め、レーヴェンタールやホルケナウのような同僚からも、マルクス主義と精神分析をつなぐ新しい試みとして高く評価され、⁽²⁹⁾ 少くとも三六年の『権威と家族』研究まで、指導的役割を果たしていたフロムが、以後に疎遠になり、やがて三八年以降破門同様の形で離反していくのは何故だろうか。

フロムの離反の原因としては、(1)経済的理由、(2)ドイツ労働者の意識調査のアメリカでの出版をめぐるトラブル、(3)ホルクハイマーのフロイト観の変化などが、主としてフロム側からあげられているが——これらについてはいずれ詳説するとして——、何といっても大きかったのは、フロム自身も述懐しているように、⁽³⁰⁾ 三八年にロンドンからニューヨークにやってきたアドルノの、研究所への——遅まきの——正式参加であろう。

当初からアドルノはフロムに対し、またフロムを重用するホルクハイマーに対しても、不満を持っていたらしい。三六年のホルクハイマー宛書簡でアドルノは、フロムが三五年の『社会研究』誌に書いた「精神分析療法の社会的制約」において、分析者としてのフロイトの冷たさを批判し、フェレンツィらの暖かさを賞揚した点をとりあげて、激しい口調で非難している。

「フロムは私を、フロイトの弁護側に廻るといふパラドキシカルな状況に追い込みました。(この論文に見られるのは)センチメンタルであり、誤れる直接性であり、社会民主主義とアナキズムの混ぜ合せであり、とりわけ弁証法的概念の手痛い欠落です。彼は権威という概念をあまりにも安易なものにしている。それなしには畢竟レーニンの言う前衛も独裁も考えられないものなのに。私は彼にレーニンを読むことを切に勧めたい。……我々のように、人がフロイトを左から批判しようとするならば、そういう「暖かさの欠如」といった子供じみた言説を口にすべきではないのです。まるでそれはフルジョアの個人主義者たちがマルクスに対してやる遣り口で

はありませんか。私はこの論文の中に、この研究所紀要の路線に対する重大な脅威を感じる、ということをおなたに言わずにはいられません。そして、……私の非難を、あなたが御自分にふさわしいと思う形で、フロムに伝えようという気になっていただければ、ありがたいと思います⁽³¹⁾。この、レーニンを引き合いに出しての激しい非難にはいささか驚かされるか、少くともここには、当時のアドルノにとっては、第一に、フロイトを弁護することは——意識内在の立場に止っていると考えられる以上——パラドキシカルなことであり、むしろ「左からフロイトを批判する」ことがめざされていること。第二に、それが共通課題でありながら、にもかかわらずホルクハイマーがフロムを重用することはおかしいとする抗議が、暗に含まれている、と考えられる。

フロムの、ひそかに行われた離反が公然たるものになるのは、五〇年代におけるアドルノの「精神分析修正批判」マルクーゼとフロムの『ディセント』誌上での論争以後であるか、その基本的モチーフは、すでにここに現れていると考えられる。しかしそこに至るまでには、なお、フロムの側、アメリカの現実に適応した形で、フロイト修正と、アドルノの側のフロイト解釈、「アウシユヴェイツ以後」におけるフロイトの読み方の微妙な変貌という、二重の過程が進行する。その経緯についてはまた稿を改めることにしたい。

(1) これらの点に関しては、拙著『現代批判の哲学』東京大学出版会、一九七九年所収の「未知の一人称を求めて」の第4章「フランクフルト学派のフロム批判」を参照されたい。

(29) Martin Jay, *The Dialectical Imagination*, Boston, 1973. 荒川幾男訳「弁証法的想像力」みすず書房、一九七五年。
Permanent Exiles, New York, 1986 (今村仁司他訳『永遠の亡命者たち』新曜社、一九八九年)。

(30) 伝記的資料については、各全集・著作集の各巻における編集解説のほか、Gunnar Rungwath (ホルクハイマー)・Funk (フロム)・Schubert (アトルノ)等 *rororo Bildmonographien* シリーズの各巻。W. Bonß, A. Honneth (eds.), *Szenari-*



- Forschung als Kritik*, Frankfurt, 1982 所収の各論文。H. Dubiel, *Wissenschaftsorganisation und politische Erfahrung*, Frankfurt, 1978 よりわけ大野 R. Wiggershaus, *Der Frankfurter Schule*, München, Wien, 1986, D. Burston, *The Legacy of E. Fromm*, London, 1991 等に負った所が多かった。
- (4) アドルノとハーマスの関係については徳永尚編「フランクフルト学派再考」弘文堂、一九八九年所収の拙論を参照された。
- (5) R. Funk (Herg), *Schriften aus dem Nachlaß*, Bd. 1, Basel, 1989.
- (6) 注1の拙論参照。
- (7) ライヒとの関係については「本講座3『無意識の発見』」所収の拙論「ライヒとフロイト」を参照されたい。
- (8) G. Scholem, *Von Berlin nach Jerusalem*, Suhrkamp, 1978, S. 197f., Wiggershaus, op. cit., S. 32
- (9) この点については「徳永」前掲書所収の「ホルクハイマーと批判的理論」の第3章(初出『思想』一九七二年一月号)を参照。
- (10) M. Horkheimer, "Die gegenwärtige Lage der Sozialphilosophie und die Aufgaben eines Instituts für Sozialforschung", 1931, "Vorwort" zu Heft 1/2 des Jahrgangs der *Zeitschrift für Sozialforschung*, 1932 とともに全集第三巻所収。
- (11) E. Fromm, *Arbeiter und Angestellte am Vorabend des Dritten Reiches*, Stuttgart, 1980 など同書に付された W. Bonß 論文の解説 (ibid., S. 7-46) "Kritische Theorie und empirische Sozialforschung", 及び同著者の "Psychoanalyse als Wissenschaft und Kritik—Zur Freudrezeption der Kritischen Theorie" (注①② *Sozialforschung als Kritik* 所収) を参照。
- (12) M. Horkheimer, "Vorwort" (注①), S. III 全集第三巻「三六一—三九九頁所収。
- (13) H. Dubiel, *Wissenschaftsorganisation und politische Erfahrung*, 1978 は「批判理論を」研究組織と政治的経験と理論形成との関連という観点から「各歴史段階」とに考察した労作であるが、「哲学的理論と個別科学的実践との弁証法的相互浸透」という点を集中的に説明した後半部は「示唆するところが多い。
- (14) 以下マルクーゼの人事に関しては「注③」に示した Wiggershaus による。
- (15) H. Marcuse, *Schriften*, Bd. 1
- (16) *ibid.*, Bd. 1
- (17) ただしリーツラーは「リベラルな面も持っていて一般にユダヤ系学者の招聘に関しては寛容であったらしく、著名なユダヤ系画家マックス・リーパーマンの娘を妻にしていたこともあって、三〇年代後半には亡命して「ニューヨークの Newschool of S. R. に職をえている。これについては「たとえば W and M Pauck, *Paul Tillich*, New York, 1976 や大野英二『ナチズムとユダヤ人問題』リブプロキート、一九八八年、二〇八頁以下等を参照。
- (18) *Studien über Autorität und Familie*, Flm., 1936
- (19) T. Adorno, "Besprechnungen", in *Z. f. S.*, Vol. I, S. 409ff
- (20) Adorno, *Gesammelte Schriften*, Bd. 1, S. 79-322.
- (21) H. Cornelius, *Schriften*, Bd. 1, II
- (22) H. Scheible, *T. W. Adorno*, 1989, S. 43
- (23) *ibid.*, S. 43
- (24) *ibid.*, S. 44
- (25) Adorno, *Kierkegaard*, 3. Aufl., 1962, S. 24
- (26) *ibid.*
- (27) Adorno, *Gesammelte Schriften*, Bd. 1, S. 325-344
- (28) *ibid.*, S. 344.
- (29) F. Borkenau, "Die Entwicklung des Christendogma", *Z. f. S.*, Vol. I, S. 174 「この研究は「マルクス主義とフロイト」の精神分析を結合する方法を具体的な事例に即して示す最初の試み」である。
- (30) 一九七一年五月一四日付けシェインの書簡。
- (31) 一九三六年三月二二日付けホルクハイマーへの書簡。vgl. Wiggershaus, op. cit., S. 299.





岩波講座 現代思想 8

第7回配本(全16巻)

批判理論

1994年2月21日 第1刷発行

定価 3200円
(本体 3107円)

発行者 安江良介

発行所 〒101-02 東京都千代田区一ツ橋 2-5-5 株式会社 岩波書店 電話 03-5210-1000 (案内)

印刷・理想社 カラー・半七印刷 製本・三水舎

© 岩波書店 1994 Printed in Japan

ISBN 4-00-010538-8

二年生れ。哲学博士(チュービンゲン大学)。早稲田大学教授。哲学・ドイツ文学・歴史学専攻。論文「Der Begriff der hermeneutischen Logik bei Hans Lipps」、Das "Tulungen, 1971. "Wege und Aporien der "Rezeptionsästhetik", in *Neue Rundschau*, 90 (1979), H. 4.
大貫敦子(おおぬき あつこ) 一九五四年生れ。早稲田大学大学院(独文学)博士課程修了。学習院大学助教授。ドイツ思想・芸術理論専攻。著書「ハーバーマースと現代」(共著、新評論)、「弁証法と実証主義のはざまて」(講座20世紀の芸術)と(岩波書店)。

TOKUNAGA, M., 1994:

(A)

"Early Critical Theory and Psychoanalysis: "Konstellation" in the Institute around 1930,"

in: *Critical Theory (Hihan Riron)*. Iwanami Series on Contemporary Thought 8, Tokyo (Iwanami Shoten)

1994, pp. 3-41.

Japanese

- 1 Introduction (pp. 1-6)
 - 2 Encounter: Fromm and the Institute (pp. 7-19)
 - 2.1 Fromm's Early Days (pp. 8-12)
 - 2.2 Development of the Institute (pp. 12-19)
 - 3 Collaboration: Fromm and the Institute (pp. 20-26)
 - 3.1 Research on German Workers (pp. 20-23)
 - 3.2 Horkheimer's Program of Interdisciplinary Research (pp. 23-26)
 - 4 Marcuse and Adorno as Outsider (pp. 26-39)
 - 4.1 Marcuse (pp. 27-31)
 - 4.2 Adorno (pp. 32-37)
 - 4-3 Fromm vs. Adorno (pp. 37-39)
- Notes (pp. 39-41)

Original Title in Japanese

徳永 恂「初期批判理論と精神分析——1930年前後の社会研究所における^{コンステレーション}思想的絵模様」

(『【岩波講座】 現代思想 8 批判理論』所収、岩波書店、1994年)、3-41頁。

Note

In this article Tokunaga argues that Fromm played an important role in the early critical theory.

